

ペルシャ語専門外交官の見たこと、聞いたこと、やろうとしたこと

特命全権大使

NGO・アフガニスタン支援調整及び人間の安全保障担当

駒野 欽一

第1章 外務省入省、語学研修、在外勤務

1. ペルシャ語専攻の背景

私は、外務省の語学研修員試験に合格して、1970年4月に入省した。

大学では、中途半端に終わってしまったがアラビア語を専攻した。此方は自分で選択した。

外務省試験に合格後、私の研修する語学はペルシャ語と決められた。私の希望はアラビア語を続けて勉強したいというものであったが、認められなかった。自分の気持の中に、それまで全く何も知らなかったペルシャ語を専門とすることに葛藤がなかったわけではないが、外務省の指示を受け入れた。それから今年で外務省勤務も35年、ペルシャ語を専門として大変幸運であったと思っている。

まずは、専門語学選択の経緯から始める。

大学入試で東京外国語大学のアラビア語科を志望したのは、外国語（当初は、私にとって外国語イコール英語であったが）を勉強し将来外国に行ってみたいとの中学生の頃以来の夢をかなえる一步になるからだった。また、少しずつ外の世界に目が開かれていく中で、先進国以外の世界にも興味を持ち始め、そうした中で、当時一般の日本人にとっては千夜一夜の世界にも等しい中近東の世界を覗いてみたいという気持ちが強くなっていった。

学生時代は、正直アラビア語も中近東の事情も中途半端にしか勉強出来なかった。言い訳になりそうであるが、そもそも、当時日本でアラビア語を学ぶには教材も専門家も極めて限られていた。余談であるが、戦前大川周明が著した『回教概論』が日本人によるイスラームの入門書としてはほぼ唯一のものであった。また、学生時代最後の一年間は大学紛争に見舞われ、構内がロックアウトされるという不運も重なった。

したがって、外国に行きたい、そこで語学を本格的に勉強してみたいとの思いは強く、アラビア語の勉強をしたいがために外務省の語学研修員試験に挑戦した。

もともと、私の入省の年には、ペルシャ語と比べればはるかに専門家の需要の多いアラビア語については研修生派遣の計画がなく、私に指示されたのは、ペルシャ語の研修であった。

1979年のイラン革命以降、外務省はペルシャ語の研修員を毎年採用しているようであるが、当時はそのような事はなく、入省して知ったことであるが、戦前及び戦後ともに各々5名に過ぎない。

全く予期せぬ展開であった。運が悪いとも思った。迷ったが、家庭の経済事情から長男である私が、これ以上働かないでは済まされない状況であった。そこで、荒っぽい理由付けであったが、ペルシャ語とアラビア語は言語として別のものであるが、ペルシャ語ではアラビア文字を使用し、アラビア語の単語もたくさん使われていること、ペルシャ語の使用されるイランは中近東の一部であり、アラビア語の勉強もやりやすいであろうこと、更には中近東で非アラブの重要な国であるイランからアラブ世界を眺めるのも意味があるという、人のアドバイスを真に受けて自分を納得させた。

結論として言うと、アラビア語のアルファベットを知っていたのはペルシャ語学習の入口では大いに助かったもののそれ以上ではなかった（そもそも私のアラビア語の能力が限られていたので、それをペルシャ語学習に生かせるほどではなかった）。また、長い歴史と文化を持つイランはそれ自体、全力で取り組む必要があり、ペルシャ語と同時にアラビア語も研修というのは実際には無理であった。

2. 語学研修

1970年には大阪万博が開催された。我々研修生は、最初の半年、万博参加各国のナショナル・ディ式典に参加するため来日する各国賓客の接遇を手伝う事になった。大方の賓客は東京にまずやってきて、大阪に向かいナショナル・ディ行事に参加した後、京都や奈良を見学してまた東京から帰国するのが一般的であった。一行の滞在期間だけでなく、事前の受け入れ準備も大変である。半年の期間に何しろ60カ国以上から元首・閣僚クラスの賓客を迎

えるわけであるから、ベルトコンベアー方式で次々に処理していかなければならない。我々もいくつかのグループに分けられて外務省の先輩たちに指導されながら沢山のアルバイトの方々と一緒に駆け回った。

そのようなわけで国内でのペルシャ語研修は入省の半年後に開始となった。研修所で3ヶ月間ペルシャ語を叩き込まれたものの、やはり国内での研修の成果は限られたものである。

翌71年7月、待望のイランに赴任した。

大阪万博の際、私は東京で賓客の日程を作る班に属していたから、大阪や京都に行く機会はありませんでしたが、それでも何回か賓客接遇の機会を与えられ、現地に行った。そんな折、生まれて初めて飛行機に乗ったし、これまた初めて新幹線にも乗った。

そんな初体験の中でも、日航機での羽田からテヘランに向かう飛行機旅は、私の中学生時代以来の夢の実現であり最も思い出深い。香港・バンコック・ニューデリー経由の長旅であったが少しも苦ではなかった。

大使館の研修指導官は、ペルシャ語の大先輩の井上参事官であった。戦前のペルシャで研修した井上さんのペルシャ語は折り紙つきであり、その流麗さにおいて井上さんほどの日本人を私は今もって知らない。9月に大学の新学期が始まるまでは、テヘランで家庭教師に付きながらペルシャ語の基礎を勉強した。またしばしば、井上さんが自宅の夕食に招いてくれた。井上さんも単身の赴任で、食事はイラン人のおばさんが用意していたがいつも大体同じイラン料理であった。その場には、大使館の現地人スタッフや日本人の留学生たちが招かれて、ペルシャ語で自由に会話し笑い転げたりしていたが、私にはほぼちんぷんかんぷんであった。早く、自分もこうした会話に加わりたいと強く思った。

地方都市で研修

9月には首都カブールから南1000キロ離れた古都シラーズに移動して本格的なペルシャ語研修が始まった。

シラーズに移動する前に一度現地を訪問し下見した。このときはバスで行ったが、途中歴史の町イスパハンやシーア派の聖都コムなどいくつかの町と村を通過するが、あとは16時間、行けども行けども土漠の連続である。そ

れでも最初のバス旅行ではものめずらしさからずっと窓から外を眺めていた。一口で土漠といってもその色も形も場所場所で随分と違うものだと感心した。しかしそれも最初のバス旅の時だけで、その後研修中に何度かシラーズからテヘランにバスで出かけたが、どこの土漠も一樣に見えてきて、16時間が苦痛でしかたなかった。

当時のシラーズは人口30万のこぢんまりした、美しい町であった。今は、300万を超える大都市のようである。イラクとの戦争で南部の住民が大量に逃げてきて、人口が一举に膨らんでしまった。インフラ等の整備は追いつかず、シラーズのよさは大いに失われてしまったようである。

井上指導官がシラーズを研修地としたのには理由がある。

まず、在留邦人が少ない事である。テヘランでは漸くパーレビ国王の主導する白色革命が軌道に乗り始め、経済の発展が見込まれ始める中で、在留邦人の数も増えていた。日本人との接触機会の多い環境での語学研修では、効果が上がらないと見たのであろう。また、シラーズはペルシャ帝国の首都ペルセポリスに隣接し、名にし負うペルシャ文学の雄、サアディとハーフェズの故地である。正統ペルシャ語の源であるシラーズの言葉こそ外交官の身につけるペルシャ語であるとの信念を持っておられたようである。私はこうした指導官の判断に大変感謝している。

しかし、シラーズに着いて暫くは、大変なところに一人置き去りにされてしまったという気持ちでいっぱいであった。

まだ、大学は始まっておらず故郷に帰った学生は戻っていないので友達も出来ない。唯一のよすがは、井上参事官が紹介してくれた家庭教師のマンズーリ先生である。毎日一時間先生の自宅に伺って、ペルシャ語の教授を受けると共に、生活上の指示やアドバイスを受けた。それ以外は独りぼっちである。最初こそ市内の立派なホテルに滞在したが、そんな事を続けていではお金が足りなくなる。そこで学校の寮に入れるまでは、市内の小さな安いホテルに移ることにした。ここは安いのが冷房なしで暑いし、ハエや蚊に悩まされた。食事もホテルの食堂では、同じもので飽きるし高いので、市内の食堂やサンドイッチ屋に足を運んだが最初は言葉が通じない。指で指し示して注文するほかなかった。

市内に日本食屋があるわけでもなく、日本の新聞やニュースが入って来る

わけでもない。マンズーリ先生と以外には話す相手も殆どなく、あまり大きくもない町の中をあちこち歩き回るのが慰みであった。

そのうち、市内の大学の寮に入れるようになり、学生も戻り始めて徐々に話し相手も出来てきた。大学の授業は外国人向けの特別の語学クラスを除けば、ペルシャ文学部の授業はいずれも難しすぎて歯が立たなかった。結局、マンズーリ先生とのマンツーマンの授業が中心となった。

マンズーリ先生のこと

マンズーリ先生は、もともとシラーズ出身で、パリ・ソルボンヌ大学に留学しフランス語と仏文学の博士号を取得して故郷に戻り、シラーズ・パーラビ大学文学部のフランス語科の主任教授をしていた。傍ら、イランの日本大使館の要請でペルシャ語の研修生の指導に当たっていた。私でちょうど3人目となり指導のつぼも心得ていたようである。

先生が強調したのは二点。一点は、語学は学ぶより慣れるので、小学一年生から6年生までのすべての教科書を徹底的に覚えさせられた。うまくまねる事を強調され、最初は先生が教科書を読んだ後、同じ文章を先生と同じように読むよう繰り返し求められた。また、読んだ文章は次回までに綺麗に清書するよう求められた。こうした口と手を使い初歩から積み上げる勉強、というより訓練の結果、授業自体には何の面白みも感じられなかったものの、ペルシャ語には自然となじめた。先生との授業において、読んでいる文章の意味が分からない事も殆どなかった。その後も私のペルシャ語勉強法は質より量であり、できるだけ多くの文章に接し、その中身を思慮することなくどんどん読み進めるやり方をしてきた。その結果、ペルシャ語は感覚としてすっきり入ってくる気がする。

先生の強調する二点目は、正統のペルシャ語を学べという事であった。正統のペルシャ語とは、新聞やラジオなどで使われる標準語である。ペルシャ語でも書き言葉と話し言葉では相当の開きがある。そうした中で外交官として使う言葉であるから、きちんとした言葉をしっかりと覚えるべきとの考えであった。確かにこれは事実で、その後の勤務で先生の言った事の正しさを実感した。

先生には、シラーズでの一年半にわたる研修中、語学研修のみならずイラ

ンをよく理解するためにいろいろと指導をしてもらった。大学の休みの期間中は全国を旅行したがこれも先生のアドバイスであった。

先生とは、イラン革命後 2 度目のイラン勤務をした際、再び会う機会があった。革命後の消息は絶えていたので、二度と会えまいと覚悟していたが、テヘランにある外務省の研究・研修機関でフランス語の教授をしていた。

建国 2500 年祭

シラーズに移った翌 10 月には、シラーズからイスパハンの方向に 50 キロ行ったペルセポリスで、ペルシャ建国 2500 年祭が開催された。日本からも三笠宮殿下ご夫妻が代表で参加された。アレクサンダー大王によって火を放たれたアケメネス朝ペルシャの宮殿の土台や石柱が鎮座するペルセポリス、その前面に広がる平原に豪華なテント村が建設されて各国からの賓客の宿舎となった。式典中、テント村では連日連夜豪華な宴会が続き、巷ではパリのマキシムの料理人すべてを借り切り、料理を準備させたと噂された。

パーラビ国王は、イスラーム以前のペルシャ帝国時代の栄華と文化を、イラン復興の目標・原理として国造りを進め、その重要なステップとして 2500 年祭を主催した。しかし、隠れた目論見として、宿敵であるホメイニ師を始めとするシーア派宗教界を封じ込めるために、宗教に変わる指導原理として、民族主義を使おうとしていたのは知らなかった。

2500 年祭のお蔭で、シラーズ市内にも近代的ホテルが完成し、そこではアルコールも飲めたとし、雰囲気もよかったので、私は時間をもてあますとよくそこに行くてくつろいだ。

また、市内には綺麗な映画館がいくつかあり、外国映画も上映されていた。いずれもペルシャ語に吹き替えられていたが、私には好都合であった。当初は、筋の理解しやすい外国映画のほうが吹き替えられたペルシャ語も分かりやすく、これを優先した。「沈黙の詩 (サウンド・オブ・サイレンス)」なども初めてシラーズで見た。イランの映画館では、主題の映画の始まる前に国王と一族を映した短い映画が上映される。画面いっぱいには国王が手を振る姿が映し出されて、バックに国歌が流れて始まるが、このとき観客はいっせいに立ち上がる。理由を説明されるまでもないが、あとで聞いた話では、このとき立ち上がらないと、おそらく不敬罪で秘密警察に厄介になるらしいとの事

であった。

次第に、現地の映画も見erようになったが、これは言葉の上からも、またストーリー展開からも、イラン人の友達と一緒に行って助けてもらわないとよくわからない。イラン人はおせっかい焼きが多いが、こんなときには大いに助かる。映画の進行を解説入りで丁寧に教えてくれるのでよくわかる。

シラーズでの一年半の研修は、ペルシャ語の基礎作りをする上で意義あるものであったと思う。しかし、日常会話に不便は感じなくなっていたものの、とても高度の交渉を通訳する自信はなかったし、また、イランの政治経済事情や国際関係の課題を研究するところまではいかなかった。最後は、ホームシックの気持ちを癒せず、研修期間最後の半年は、井上指導官にお願いしてテヘランに戻してもらった。しかし、テヘランでは案の定大使館も含めた日本人社会にかかわりを深くする事になり、研修の成果はあまり見られなかった。

1973年6月には、いよいよ大使館での勤務が始まる。

3. 在外勤務

テヘランでの大使館勤務は、結局、革命直前の1978年12月まで続き、研修期間も含めると、イランには7年3ヶ月間滞在したことになる。この間、有田（のち事務次官・JICA 総裁）・井川（のち駐仏大使）両大使に仕えるが、大使を直接補佐するプロトコルの仕事が長かった。大使の希望もあり、また私も現地での仕事も生活も気に入っていたので、結果として長い滞在になった。家内との結婚も2人の娘たちの誕生もテヘランに於いてであった。離任の際には、挨拶で、「研修生として赴任した際にはスーツケース2つでやって来たが、今こうして家族4人で30以上ものスーツケースを抱えて帰国する。私の持ち物はすべてイランで得たものでありイランに大変感謝している」と言ったのは、決して冗談ではなく正直に事実を話したまでである。

1970年代のイラン

パーラビ国王が、白色革命を開始したのが1963年、建国2500年祭が1970年、国外退去を余儀なくされたのが1979年である。この20年弱の期間に、国王は、自らの指導力を固めると共にその絶頂に至る瞬間に奈落に落とされ

るといふ運命の変転を経験する。

私が職務に就いた直後の1973年10月には、第4次中東戦争を契機とする第1次オイル・ショックが起きる。日本でも、ティッシュ・ペーパーまでが買いあさられて狂乱物価が大きな話題となった。石油の消費国側のショックは、産油国側にとっては経済成長の千載一遇のチャンスであった。事実、以降イランでは、年率40%という途方もない経済成長を実現する。第1次オイルショックでは、産油国側の立役者であり、サウジ・アラビアに次ぐ産油国であるイランの指導者、すなわちパーラビ国王の下に日本からも三木副総理や中曽根通産相などの要人が相次いで来訪し、日本への原油安定供給への理解と支援を求めた。

パーラビ国王は、この機会に一気に近代化・工業化を進めると大変強気であった。アバダンの製油所に加えて新たな大型製油所の建設、三井グループによるIJPCほかの石油化学プラント建設、テヘラン・マシャッド間の新幹線建設、原子力発電所建設など大型案件が目白押しであった。また最先端技術にこだわり、例えば電話交換機では従来型のアナログ式は受け入れず、電子交換機に固執するといった具合であった。

町では、大きなビルや豪華な屋敷がどんどん立つようになったし、また、輸入商品があふれて邦人の婦人方にとっても買い物の楽しみが増えた。

国王は、大型プロジェクトをどんどん進めると共に、内政面では、75年に国民の一致団結を図るとの名目で政党の大同団結を実現して、ラスターヒーヅ（イラン復興）党を誕生させた。また、76年のイラン暦新年（3月21日）には、同年を2535年とするペルシャ帝国暦とも称すべき暦に切り替えた。

外交面では、隣国イラクのサダム・フセイン副大統領との間で、強者の立場から交渉して、懸案の両国国境線問題を解決した。従来、国境を流れるシャトル・アラブ側の国境線はイラン側の河岸となっていたがこれを、川の中央線に戻す事に成功した。それ以前にも、アラブ首長国連邦との間で帰属が争われていたペルシャ湾のアブー・ムーサほか3島を軍事力で威嚇して支配下に収めた。

内外共に国王の権威は大きくなり、順風満帆のごとき時代であった。ある時の記者会見で、国王は、質問に答えて21世紀の世界を指導するのは、米国、EU、ソ連、日本とイランであると述べた。

そんな空気の中で、IJPC プロジェクトをはじめとする大型案件、原油輸入を中心とする貿易の活況などを通じてイランとの二国間関係は拡大の一途となり、大使を補佐する私も結構忙しかった。

大使館での仕事

プロトコールの仕事は大使の指示に従って、大使が仕事しやすいように手を尽くすことであるから、大使によって求められる事も違うし、場所時期によっても違いが出てこよう。大使の日程管理、設宴や公邸での行事の準備や実施など日常業務に加えて、テヘランでは見かけの格好良さに比べてつくりの悪い公邸の建物の維持管理が大変であった。冬の夜中、大使から電話がかかってきて、暖房が故障して凍えそうだと訴えられた事もあった。公邸のサロンに天井が落ちてきた事もあった。これは、屋上に落ち葉が積もり、雨水の流れ口となる樋をふさいだ結果雨水がたまって、泥で出来ている屋根から浸透して、ついには天井の崩壊に至ったものである。こんな極端なケースはそんなにはないが、公邸の修理は日常茶飯事で、大使館の現地人担当者や家主との関係で、言葉が出来ないと埒が明かないためすべて私が付き合う羽目となった。

啓蒙君主を自認する国王の下では、大臣はじめ大方の官僚は英語やフランス語をよく話す。外国語を話せる事がステータス・シンボルとなっているから、彼らの多くはむしろ外国語で話したが。従って、私が大使の通訳をする事は少なかった。本邦からの要人の来訪に際して、こちらが日本語だけという場合に、ペルシャ語通訳の出番となるが、当初は井上参事官がもっぱらその役割を負っており私に出番はなかった。井上参事官の離任後そうした役割が私に回ってきたが、大臣の中に外国語の出来ない人も何人かはいる。テヘランとマシャッド間の新幹線計画を担当したシャレスタニ大臣はそうした一人であり、日本がこのプロジェクトを狙っていた事もあり大使も足しげく通っておられたのでその都度同行して通訳した。

任期の後半には私は経済班所属となり各省派遣のアタッシェの手伝いをしたが、自ら大きな懸案やプロジェクトを手がけるチャンスには恵まれなかった。

そうした環境の中では、ペルシャ語に差し迫った必要があるわけではなく、

語学の研鑽が大いにはかどるといふわけにはいかなかった。

福田総理大臣のイラン訪問

イラン在勤の中で一番大きな思い出は、1978年9月5日の福田総理一行の来訪である。園田外相も同行し、記者団も含めて多人数の一行であった。国王は何度か日本を訪れているが、日本の総理の訪問は初めてである。

訪問自体はうまくいったが、当時すでに国王の独裁的指導の弊害はいろいろな形で噴出し始めていたようだ。福田総理一行が国王との会談のため、テヘランの町の一番北にあるサアダーバード宮殿に向かおうとしたとき、市内を南北に走るパーラビ道路では国王への反対デモが展開され、一行は迂回して行かざるを得なかった。9月には中国の華国鋒主席がイランを訪問したが、外国首脳はこれが最後となった。

私は、総理訪問では二つの役割を与えられた。一つは配車である。一行は、総理が市内の迎賓館に宿泊し、他の随員はホテル、また同行記者団は別のホテルというように宿泊場所からして3箇所に分散するのに加えて、イラン政府差し回しの車、大使館の車、借り上げの車とこれまたばらばらであり、殆ど英語を解しない運転手達に行動予定をしっかりと理解させる事などほぼ不可能であった。そもそも、日程すらなかなか確定しなかった。最後は、運転手一人ひとり用に現地語で行動予定を書いた紙を渡して指示したが、相当に混乱した。

二つ目は、首脳会談の通訳であった。国王は英語が上手であるから、英語通訳であったが、シャリフ・エマミ首相はそうは行かず、ペルシャ語で私がやることになった。晩餐会はタキシードということで、その際には私も初めて先輩に借用したタキシードを着用した。

シャリフ・エマミ首相は、かつて上院議長も経験した大物政治家で、宗教界とも近い事から、反対派への融和策として起用されたが、そのような小手先でどうにかなる状況ではなかったようである。また、首相自身、大乱に向かうエネルギーを持っているとも思えなかった。首脳会談の通訳中も、隣りに座っている通訳の私にどこでペルシャ語を勉強したのかとかをしきりに話しかけてきた。また、最後には通訳ご苦労様とあって、大きなパーラビ金貨を一つ私にくれた。

テヘランを後にする

総理訪問中のテヘランの状況は、同行の園田外務大臣が帰国後、国会での質問に答えて、「尋常ならざる空気を感じた」と答弁するほどであった。もっとも私にとっては、通訳の仕事を含めて、無事職務を果たせた開放感のほうが圧倒的であった。

確かに、この年のはじめから、テヘラン大学では学生のデモのため殆ど授業が出来ない異常事態が続いているという話は聞いていたし、その前にも、77年の8月には、10年以上首相を務めたホベイダに変わり、アムゼガールが首相の座に着いた。これは人身の一新という事で理解も出来たが、アムゼガール内閣は翌年8月には早くもシャリフ・エマミ内閣に変わっている。

あとで明らかになった事であるが、この年78年には、1月にコム、2月にタブリーズで反政府デモがあり、9月の福田総理訪問時にはとうとうテヘランで大規模な反政府デモとなり、福田総理の出発後政府は全国11都市に戒厳令を敷いている。確かに尋常ならざる状況であった。11月にはシャリフ・エマミ内閣も総辞職を余儀なくされ軍人のアズハリ内閣が誕生する。

私とは言えば、70年代を通じて、国王の立派な容姿、格調の高い演説に慣れすぎていたせいであろう、英邁な国王ある限りイランは安泰であろうとのんきに構えていた。しかし、年末にはいよいよ東京に帰る事になり、12月のはじめ、準備一切を整えロンドンからの日航機を待ったが、これが飛んで来られず、自宅は既に引き払っていたのでホテルでいつ来るかわからない飛行機を待たざるを得なかった。幸い1日の遅れで済んだが、この飛行機が革命前の最後の日航便となるに及んで、さすがに私も、事態の深刻さを理解せざるを得なかった。それでも成田に着いて、テヘランから避難帰国した邦人という事で待ち受ける報道陣に質問攻めとなったが、テヘランの事態はコントロールされており、私は不安は感じていなかったと答えた。これも実感であった。